同志社社会学研究　NO.1, 1997

【研究論文】

韓国サーカスにおける「家族」
—移動集団の構造と戦略—

林　史樹
HAYASHI Fumiki

序　サーカスは家族のようなところなのか？

1．研究の概要

チャンネルをひねると、レポーターがサーカス団に体験的な入団をして取材をしていた。興味深くテレビを見ていたところ、番組の最後になって、そのレポーターがやや感動的にこう語った。「サーカスは本当に一つの家族のようなところでした」と。果たして、サーカスは本当に家族のようなところなのだろうか。

韓国[1]のサーカスは、朝鮮半島が日本の植民地支配下にあった時代に、日本を経由して入っている。その後、朝鮮戦争を経て1960年前後に全盛期を迎えるものの、1970年代からの高度経済成長にともなって国内の娯楽も多様化したため、経営が年々難しくなり、観客動員数も減少していく。現在では巡業形態で興行をするサーカス団も 4団体となり、構成員の規模は小さいもので20名弱、大きいもので約30名である。現在では、国内のサーカス団の存在を知らない者も多い。また、あまりよいイメージで捉えられていないこともあってか、韓国においてサーカスを扱った先行研究はほとんど見られない。

歴史的経緯からも、韓国サーカスは日本に深く関係しており、サーカスが日本を経由して入ったことの名残を現在もとどめている。特に、サーカスの劇場の立て方や、曲芸の種類、サーカスで使われる専門用語に、そのことが感じられる。曲芸は、現在、行われている大半のものが日本から入ったものであり、今日では日本で行われなくなった「伝統的」な曲芸もかなり残っている。また、サーカスでの生活をするうえで曲芸や劇場に関して用いられる専門用語の多くが日本語に由来したものである。調査中に記録した範囲でもそのような専門用語は 120語を越えており、若い世代では、これらの言葉が日本語に由来している言葉であることを知らずに使う者が多い。

サーカス団の収入は、入場料と幕間に行われるカメラ販売で得られた収益である。この他、サーカスの劇場内で得られる収入に、劇場内で貸出される椅子代や、場内売店の売り上げなどがある。給与は、月給と公演期間中の日当によって支払われる。1994年の統計資料や筆者が聞きおよぶ範囲では、20代前半の曲芸師の給与は同年代の会社員の平均給与よりは高く、30代前半で比較すると会社員とほぼ同程度、30代後半から40代になると平均的会社員に抜かされるとみてよい。ただし、給与比較にはサーカスでは未制度の福利厚生や保険、会社員のボーナスを考慮する必要があるうえ、サーカスの給与として取り上げたものは、比較的収入のよい曲芸師のものであり、下回り（雑用係）は、この約5～6割の所得額になる。ただし、その一方で、サーカスでは食住費が一切必要ない。

公演の準備期間中は、途中休憩は多めにとりながら作業が進められるものの、夏期で約13時間、冬期で約 8時間、公演期間中は曲芸師で約 11～14時間、下回りで約 14～16時間が労働時間として拘束される。公演は、表向きは午前11時から午後11時まで 4回の連続公演で行われることになっているが、客足を見て公演の有無や開始時間が決められる。一年を

通して公演と準備作業が休みなく繰り返され、休みは、準備期間中に雨で作業が中止されたときか、1年に2日ほど、成功した場所の後に突然に言い渡されたときだけである。

劇場は、日本のサーカスが入ってきた当時の、丸太を組み合わせたものにシートを覆いかぶせた丸太小屋で公演を行っている。宿泊は、劇場に隣接してつくられるテント（寝小屋）になる。寝小屋は、野営用テントを一回り大きくした家型のテントで、広さは4畳半くらいのものが多い。食堂も組立式の大型テントで、炊事係が行動をともにしている。トイレは劇場内に穴を掘り、足板を通して周囲を合板で囲った簡易式であり、衛生的にもよくない。道具や劇場設営の機材、シートの大半が耐用年数を越していると思われる。

サーカスに対するイメージは、マスコミの影響も受け、消えて行く存在としてのイメージが強いほか、出版物や歌などでも、テント暮らしの生活を浮き草にたとえ、淋しさをイメージさせるものが多く見られる。サーカスにいる子供たちに対しては、日本で言われているのと同様に、「悪い子はサーカスに身を売られ、酢を飲まされて体を柔らかくさせられ、曲芸に失敗すると夕食も与えられない生活をする」と語られる。また、観客の中には、不憫だといって子供たちに直接金品を与える者さえいる。さらに、サーカスに対する偏見は強く、周囲から入団を反対されるだけでなく、サーカスの構成員であることで婚約を解消されたり、結婚が許可されず駆け落ちをしたケースもよく聞かされた。偏見はサーカス団の内部でも存在し、学歴がある構成員からは、サーカスにいる者は無学で教養がないといった言い方がされる。

そのような経験は構成員同士で共有され、劣等感という形で心に残る。サーカス団にいることが知れると母親が悲しむというのが理由で、何年ぶりかに会ったにもかかわらず、母親にサーカス団にいることを告げなかった曲芸師もいる。また、サーカスにいることを知人に知られたくないために撮影を拒む者や、サーカスという職業にアイデンティティを持てず、他の職業に就きたいと考えている者も多くいる。

本論では、しばしば見受けられる冒頭のような言説を受けて、サーカスが本来的に家族のような雰囲気を持ったところなのか、サーカスが家族のような存在を我々にイメージさせるところのものはどこから来るのかについて検討することを目的としている。

冒頭にあげたサーカス団はフランスを中心に公演して回っているサーカス団、「パランデール・サーカス団」であり、筆者が実際に調査[2]を行ったサーカス団は韓国にあるDサーカス団である。したがって、本論で出た見解をもとにして、レポーターの体験まで否定するものでないことはいうまでもない。ここでの見解が、このような集団を理解するための一つのきっかけとなることを目標に書かれたことを付記しておきたい。

2．韓国サーカスと構成員の流動

サーカス団の調査中に注目されたことの一つに構成員の流動があげられる。Dサーカス団では、調査中の9ヶ月の間に90名弱の構成員がサーカス団に出入りしていた。通常で20名から30名の間を動くDサーカス団の構成員数から考えると、その3倍以上の人数がDサーカス団に携わっていたことになり、ここから構成員の流動が頻繁に見られたことがわかる。さらに、サーカスに長期に滞在したことのある元団員たちがサーカスに来て、作業を手伝っていくことがあるが、彼らに対しても報酬が支払われるのが慣例である。これらの中には筆者が逐一記録できなかった者も多数おり、それらの者も加えた場合、サーカスに出入りをした人数はさらに増え、構成員の流動がいかに頻繁であったかがわかる。

さて、このような構成員の流動は、他の諸地域の移動集団の事例にも見られるように、社会的緊張が

起きた移動集団に集団としての永続性を保持させるものであった。そして、少なくとも韓国サーカスにおいては、そのような働きを担っていた構成員の流動こそが、集団組織に見られた事柄や興行形態などと密接な結びつきを見せていた。

しかし、頻繁に構成員の流動が起きる集団も、一つの集団としての運営を行い、そこで各個人が生活をしていくためには、ある程度の集団としてのまとまりが必要とされてくるだろう。そこで、そのような働きをするものの一つを取り上げて見ていくことにしたい。

第1節　フィクションとしての「家族」とその語られ方

韓国サーカスでは、「俺たちは家族だ」ということをよく聞かされた。このフレーズは擬制的なフィクションとしての「家族」を彷彿させるものであり、構成員の流動と密接な関係を持っていることは容易に想像できる。

ここでいうフィクションとしての「家族」は、一般に擬制的親族といわれているものとほぼ同じ意味合いを持っている。擬制的親族は、個人間あるいは集団内で実質的な相互扶助関係を作り上げるのに有効な手段であるといわれており、さまざまな社会で見受けられる擬制的な親族関係・親子関係・家族関係に対する研究成果も数多く出ている。そこで、そのような事例をいくつか見ていくことにしたい。

たとえば、中国雲南省・大理盆地の白族を調査した横山は、白族社会においてローヨウ（老友）という擬制的親族関係が創られることに注目している（横山　1990）。これは、親類が少ない地域で生計を立てる場合、同年層の子供同士にローヨウ関係を結ばせることで、その子供たちを中心にして双方の家族が親族のようなつきあいをするというものである。その際、子供たちは相手方の家族に対して両親や兄弟につける呼称をもって呼びかけ、本当の両親や兄弟に対して振るまうようにすることが期待される。この他にも、漢族では兄弟関係を結ぶ「結拝兄弟」や、ローヨウに比較的よく似た「同年」という擬制的親族関係が結ばれる事例が多く見られるという。

また、小山は、アボリジニ社会では、ある一定の距離を越えて人間関係をつくる際に、血縁関係にない外部者に対しても、人々をかならず親類のカテゴリーに入れて考える（小山　1992：96）ことを指摘している。このような人間関係のつくり方は、白族社会やアボリジニ社会以外にも、さまざまな地域で見られることはここで指摘するまでもない。

さらに、このことは、日本の「ヤクザ」の集団や大衆演劇の集団と比較すると一層明らかになる。たとえば、日本の「ヤクザ」について調査を行ったRazは、「ヤクザは日本の伝統的な社会にある組織の多くとおなじく、疑似家族としての家社会にのっとって組織化されている」（Raz　1992：179）といい、その存在と力関係は「もとをたどれば日本の伝統的な家・同族にあった」（Raz　1992：200）と指摘している。また、日本の大衆演劇について調査を行った鵜飼も「幕内というところは、一日でも先にはいったらもう先輩なのだから、たとえ相手が年下であっても、‘にいさん’、‘ねえさん’と呼びなさい」（鵜飼　1994：18）と教えられたといい、一つの家族に擬制しているという。その他、日本のサーカスにおいても、このような「家族」が存在している。たとえば、4年間サーカスで道化師をしていた宇根元は、「サーカスで先輩のことをなんでにいちゃん、ねえちゃんと呼ぶか判るか？　それは、サーカスってのが団員同士家族のような気持ちにならないと成り立たないものだからなんだ。」と芸能部長からいわれているが、これも集団のまとまりのために「家族」が演出されているといって差し支えないだろう（宇根元　1988：129）。

しかし、このような呼称で特徴づけられる疑似家族、フィクションとしての「家族」はだれに対して

も開かれているものではない。ミウチとしての「家族」、あるいはサーカスの内部にいる者を規定するためには、必然的にサーカスにとってヨソモノとされる外部の者が規定されなければならない。そこで、次節では、サーカスの構成員たちが、どのようにしてサーカスの内部と外部を規定しているのかについてみていくことにしたい。

第2節　韓国サーカスに見られる外部のつくり方

1.「社会」というカテゴリー

サーカス団は、外部から一線を画した、一つの社会を創りあげているということができる。ただし、各サーカス団ごとに一つの社会単位をつくっているのではなく、現在の韓国に存在するサーカス団全体で一つの社会単位と見ることができるのである。したがって、その社会の住人は、韓国のサーカス団で現に生活をしている者となるが、韓国国内に存在する、もしくは存在したサーカス団で一定期間の生活経験のある者、彼らの言葉を借りれば、「団体生活」をある程度経験した者も含まれている。また、その「市民権」は、いかに「団体生活」を長くしたのか、いかに「団体生活」に深く入り込んだのかということに関わってくるようである。そのような意味で、クラブや地域コミュニティの「市民権」の取得過程に類似しているといえるだろう。

そして、彼らは一般にサーカス以外の外部の世界を「社会」という言葉を用いて、彼らが見たサーカスの内部の世界と区別している。彼らが所属するサーカス団、あるいはサーカスの世界も一つの社会であることに間違いないが、ことさら「社会」という言葉を用いて区別することは、少なくとも「サーカスでの生活は“標準的な”社会生活とは違う」という意識を彼らが感じていることの現れと見てとることができる。

また、サーカスをやめて、それ以外の職業に就くこと、サーカス以外で生活を営むことを「社会にでる」といった言葉でもって表現をする。これは、日本語でいうところの「社会人になる」という言葉に比較的よく似た意味で使われており、社会的責任が伴った、社会的ルールに従った生活をするということに近い。

さらに、このように「社会」という範疇をサーカスで用いて外部社会を想定することは、構成員のまとまりを強めるのに非常に有効な手段となっていると考えられる。なぜなら、「社会」が厳しい規律を持っていれば持っているほど、構成員たちは「社会」に出ることを恐れるのであり、「社会」に対する「反社会」という立場を共有することによって、ときにまとまりを見せるからである。

2. 呼称をめぐる境界認識

韓国のサーカス内では、年齢を基準とした序列を見ることができる。このような集団内での序列は、たとえば日本のサーカスや日本の大衆演劇に見られるような、先にその集団に入った構成員が、実際の年齢に関係なく、常に先輩としてそれ相応の敬称をつけて名前が呼ばれるのとは異なっている。一般的に、韓国の社会では日本と比べて年齢による序列を守ることが要求される。そのことが、日本における芸能集団に対して、集団内での秩序付けとしての機能に、年齢による序列が反映された理由として考えられるのである。

しかし、ここで彼らは、単に韓国社会の慣習に基づいて序列をつくっているのではない。それは、サーカスの構成員がサーカスでの生活をするうえで、すべての者に対してそのルールを適用しているのではないことから説明づけられるだろう。つまり、一般の韓国社会では、誰に対しても年齢によって序列をつけようとするのに対し、サーカス団の構成員は、サーカスの内部世界の者と判断が働いた相手に対しては年齢による序列を守るが、外部の世界の者と判断が働いた相手に対しては、必ずしも年齢による序列を守るとは限らないのである。そのときに、判断

の決め手にしやすいのが、名前の後につけて呼ばれる呼称である。この呼称をどのように区別して、使用しているかによって、呼ぶ者が呼ばれる者を、外部と内部の境界線上のどちら側にいる人間と認識しているかが判断されるのである。

表からもわかるように、たとえば、団体生活の長い男性同士が出会った場合、年下の者が年上の者を「Hyong」（兄）[3]という敬称をつけて呼ぶ。また相手が、同年齢か年下であれば呼び捨てるのが普通であるが、まだ、相互に緊張関係にある同年輩の者同士であれば、「ssi」（氏）という敬称が使われることもある。このことは、新入団者が団体生活を長く経験した者であったときの、その構成員と既存の構成員との関係にも当てはまる。これに対して、新入団者が団体生活を知らない者であったり、団体生活を経験したことがあってもごく短期間の経験でしかない者である場合、ある程度の年齢差がないと敬称をつけず、呼び捨てにするケースが多く見られた。表を参照すると、12・13・14・15などがその例といえる。彼らは、年下の構成員からも呼び捨てで呼ばれたり、女性が年上の男性を呼ぶときの呼称をつけて呼ばれる傾向にあった。このことは、先の構成員たちが、まだ団体生活を長くしていないため、完全にサーカス内の者と判断されていないことにもよる。

そのことを示す具体的なケースとして、8才年下の曲芸師が長い間、筆者に対して呼び捨てをしていたことがあげられる。ところが、ある時を境にして「兄」という敬称をつけだした。それは、筆者がサーカス団に「ある程度」長くいたという事実と、呼び捨てを別の団体生活の長い年上の曲芸師からたしなめられたことによる。このようなルールの存在は、その集団内の秩序を保つのに役立っているのである。さらに、表中の06・07を見てもわかるように、このような呼び捨ても、年齢差が大きく、内部者とされている構成員の配偶者に対しては事情が異なってくる。

例外的に、団体生活が長く、年齢が上の者であっても、サーカス団の他の構成員からも反感を持たれた者に対して呼び捨てが使われたり、個人的に好感を持てない構成員に対しても陰で呼び捨てが使われることがある。しかし、このような状況を見てみると、その集団内での暗黙の了解、もしくは共通の認識の上で成り立っているから呼び捨てが許されていることがわかる。自らがその集団の内部世界の住人であり続けようとする範囲においては、彼らは呼び名に敬称をつけるというルールに準拠するのであり、同時にそれによって外部との境界を意識的に引いているのである。

3.「日本語」をめぐる境界線

韓国のサーカス団では、サーカスが入ってきた歴史的経緯からみても日本サーカスの影響を受け、現在でも日本語を借用してできた用語が多く使用されていることは、序論で少し触れた。これらの言葉は一般的な韓国人とは共有できないばかりでなく、本来の日本語からも発音やそれが指示するものまで、若干の「ずれ」を含んでおり、通常の日本語話者でも解せない言葉も含まれている。その意味においても、まったく韓国サーカスで「団体生活」を経験したことがある者だけに通用する隠語ともいえる共有語としての位置づけをもつ「日本語」ということができる。

しかし、サーカスで使われる「日本語」は決して排他的な性格をもつものではなく、普段の会話の中で自然に使用されてきた。したがって、外からきた者であってもサーカスに長期的に所属さえすれば、必要に迫られて自然にそれらの「日本語」を習得していくようになるのであり、それらの用語を覚えてこそ「一人前」とされたのである。逆に言えば、日常生活の場において多用されるこれらの「日本語」をよく知っていることが、「団体生活」を長期的に経験してきた証拠といえるだろう。

話される相手に特別な制約をもうけない「日本語」ではありながらも、韓国サーカスの内部からみた場

合、「日本語」を共有できる者と「日本語」を共有できない者とに分けることができた。その共有語としての「日本語」が、すなわち韓国サーカス内部に属する者と外部に属する者との一つの境界線を創りだすのに貢献していたのである。

第3節　「家族」としてのサーカス

以上のような境界線がサーカスの内部と外部を区分していたが、内部の者たちで構成されているところのサーカスが一つの「家族」として認識されるとき、人々はサーカスのどのような側面を見ているのだろうか。韓国サーカスにおいて、そのようなまとまりを感じさせられるケースを次に取り上げていきたい。

1．集団内の規律

韓国のサーカス団では、年齢を核とした規律と男女による役割の分担が見られる。

年齢による集団内の規律は、確かに必ずしも厳格に守られているとはいえない。しかし、原則としては十分に守られており、食事の際には特に明らかにその規律が見られる。たとえば、食事の時に構成員同士が同時に着席した場合、茶碗は必ず年齢順によそわれ、構成員の側でも目上の者に先に食事をゆずっている。

酒に関する習慣はさらに厳格であり、内部と外部の違いや曲芸師と下回りの区別なく、年齢がうえの構成員には必ず両手を添えて酒をついでいる。ただし、酒に関する習慣は一般韓国社会も厳しく、それに準拠したものともいえるだろう。

年齢による序列は「お使い」にもみられる。「お使い」はサーカスで頻繁にみられ、子供に「お使い」をいいつけることはごく当たり前のこととされている。また、5才くらいの年齢差があれば、成人の構成員同士でも、トランプなどの雑貨品、酒類や菓子類などの食料品を買ってくるようにいいつけられる。報酬として駄賃が支払われるときもあるが、サーカス内での年齢による規則として、嫌々でも無償でしたがうことが多い。たとえば、30代前半の構成員が、VTRを楽しんでいる20代後半の構成員に対して、タクシー代を支払って夜中に現金を引き出してくるようにいいつけたことがある。その際も、20代後半のその構成員はいわれた通りにしたがっていた。

また、構成員間での争いが暴力沙汰にまで及んだとき、暴力を振るわれるのは決まって年下の構成員である。特に、団体生活が長い者同士の争いの場合、ほとんど例外はなく、年下の者が年上の者に暴力に訴えることはない。たとえば、ある構成員が8才年上の構成員に、仕事をまじめにやらないという理由で、多くの構成員の前で殴られたことがあった。何度殴り倒されても口答えをするだけで、年上の構成員を殴り返すことはなかった。これも年齢を核とした一定の規律が存在することを示しているだろう。もし、年下の構成員が年上の構成員に暴力を振るおうとすれば、周囲からたしなめられ、「よくない行為」としてサーカス内で長く「語り継がれていく」ことになるのである。このようにして、年齢による序列は、サーカスの内部者同士と見られる関係において守られていくのである。

また、集団内では、男女の役割がおおよそ決められている。まず、小屋掛け作業（劇場を立てる作業）には女性が参加することはない。それに対して、韓国の一般家庭においてもそうであるように、炊事は女性が行い、炊事係がいないときには、その場に居合わせた女性構成員が男性構成員に給仕をする。その他、男性構成員に食事のための席を譲ったり、公演までに時間が許すときには男性構成員の後で食事をとることも珍しくなかった。子供たちも小屋掛け作業から免除される。しかし、「お使い」の用事があるときには、それから逃れることはできない。厳密には役割分担とはいえないが、作業中には構成員が自由に用事を済ませることができないため、間接

的に成人構成員の作業を手伝っているといえ、実際に、余分な時間がとられないために作業が早く進む傾向にある。

2．サーカスで行われる「家族」的な行事

サーカス団は、常に「家族」として語られており、韓国社会の一般家庭に見られる行事もうまく取り入れられている。

たとえば、構成員の誕生日には一般の韓国社会と同様にわかめスープを食する習慣が取り入れられている。誕生日にケーキや贈り物が渡されることもあった。また、クリスマスにはクリスマスカードが配られ、２月14日には化粧部屋でチョコレートが配られた。日本の盆にあたる「ch'usok」（秋夕）の日や、正月には餅入りスープが食卓を飾るなど、書き入れ時にも簡単にではあるが、韓国で一般的に行われる行事を工夫して行っている。日本の法事に似た習慣である「chesa」（祭祀）が、父親を亡くしたある男性構成員のために行われたこともあった。また、「oboinal」（父母の日：日本でいう父の日、母の日）には、団長をはじめ年輩の構成員には、子供の構成員から胸に指す花飾りが贈られた。

その他、「家族」的な行事とはいえないものの、そのようなまとまりの雰囲気を盛り上げるものとして、以前は一場所での公演が終わるごとに決まって打ち上げが行われたらしく、Dサーカス団でもそのような打ち上げが調査中に２度行われた。また、これも調査中には２度しか行われなかったが、かつては、一場所ごとに劇場内での無事を祈る「kosa」（告祀：お祓い）を行っていたという。年末には忘年会も開かれた。

3．キャッチフレーズとしての「家族」

慣習的に、韓国のサーカス団では、サーカスの各団体のことを「chip」（家）といい、その団体の構成員のことを「sikku」（家族、世帯の構成員）といった言葉で表現している。そこで、韓国のサーカス団で頻繁に使用されていた「chip」と「sikku」という言葉がどのような意味で使われているのかを考えていくことにしたい。

まず、「chip」について伊藤は次のように述べている。「居住・生産・消費の生活単位としている生活空間を一般に“chip”と呼んで」いるが、「ある意味でかなり閉鎖的な生活空間を成している」（伊藤 1977：285）。また、李は、「chip」と「kajok」（家族）を比較して、「民族誌的立場からいえば、韓国の‘家族’という言葉は一つの学術用語であり、一般に広く日常語として使用されているものは、家族よりいわゆる‘chip’という用語である」といい、「chip」という概念について、「家族構成員、家族構成員が生活する居住地、建物、生活共同体としての家族、それ以外に家族の範囲を超えて同族、親戚まで含める場合がある」（李　1975：29）と述べている。また、崔によれば、「家（chip）ということばは建物を意味する外に、（１）現実の家族集団（２）過去から未来に及ぶ観念的な家族集団（３）同族集団の意味を内包している」（崔　1977：51-52）ものらしい。

以上のことをまとめると、「chip」とは、居住を主とした生活の場をはじめ、家族構成員、もしくはそれに準ずる極めて緊密な関係にある集団を指す言葉といえよう。

次に、「sikku」という概念について、李の見解をまとめてみると、「sikku」とは一般的に通用する日常語であり、「私の“chip”の“sikku”」や、「その“chip”は“sikku”が多い」などと使用される。「sikku」は、一つの「chip」の中に一緒に住んで、食事を共にする人々を指すものであり、具体的に家族の構成員をいう（李　1975：33）。しかし、「sikku」という概念は構成員の成立関係などを含むものではなく、その意味で学術用語というより日常的な用語といえる。「kajok」（家族）との対比で述べると、「家族は社会的に公認された夫婦関係と父母、子女、そして父母を中心とした兄弟姉妹の関係、すなわち

血縁関係を持っており、一つの垣根の中あるいは一つの屋根の下の共同住居と共同経済生活を営む集団である」（李　1983：52）のに対し、「“sikku”という言葉は家族の構成員を指すことで家族とは区別される概念」（李　1983：52）である。

「sikku」についてまとめると、「sikku」は一般的に家族を指すことも多いが、厳密には「家族」と違って、必ずしも血縁に限られておらず、世帯を構成する人々といえる。すなわち、「chip」の中で共に生活をする構成員を指しているのである。

具体的に韓国サーカスの文脈の中での「chip」と「sikku」は、「A　chipに行く」（Aサーカス団に移る）、「B　chipから来た」（Bサーカス団から移ってきた）、あるいは「今はC　chipのsikkuになっている」（現在はCサーカス団の構成員である）、「うちのsikkuは20人だ」（私のいるサーカス団の構成員は20名である）という使い方がされているのである。

また、調査中にも「俺たちはkajok（家族）なんだから、遠慮はするな」であるとか、「俺たちは家族なんだから、困ったときには何でも言え」などといった言葉がよく聞かれた。その他にも、公演後に屋台やテントで酒を飲み語らうときなどには頻繁に「俺たちは“kajok”なんだ」という言葉を用いていた。この血縁的な関係を持った「chip」の構成員である「kajok」という言葉も、以上のように「sikku」という言葉同様に使われていたのである。

このような言葉に加えて、団長を「オヤジ」（親父）と呼ぶことも特徴の一つである。さらに、表に見られるように、若い構成員の中には、団長のことを「オヤジ」という以外にも、「aboji」（父）[4]と呼ぶ構成員もいた。また、そのような「父」の存在に対して、韓国のサーカス団では日本のサーカス団と同様に、「本部のお母さん」と呼ばれる女性が存在し、団長に拮抗する発言権を有する場合がある。「本部のお母さん」は、構成員たちの面倒をいろいろと見たり、相談相手となったりもする存在でもある。この役割は主に団長夫人が肩代わりすることが多いが、Dサーカス団では、団長夫人のサーカスでの生活経験が浅いこともあり、特に「本部のお母さん」に相当する女性は見られなかった。

4．演出される「家族」的なまとまり

集団内の結束も、集団の外部を想定することでより強固な連帯感を創り出し、外部からの干渉を受けたとき、この結束を持って問題を解決しようとする。このことは、「家族」の雰囲気を創り出すのに強く影響しているといえるだろう。

サーカスの構成員同士は集団行動をよくとっている。一つの理由に、他に連絡をとる相手もなく、他の職業に就いている友人がいる場合でも、自由時間を合わせにくいことなどがあげられるが、作業期間中の昼食後には数名でスポーツを楽しんだり、近くの川で魚とりを楽しむことが多かった。また、公演の打ち切りで時間が空いたときにはワゴン車で寺巡りなどに出かけることもある。普段は３～４名でまとまって繁華街に繰りだすことが多く、公演後は数名で酒場やカラオケに行くことが多い。

さらに、集団生活をしているためか、同じものが流行する傾向が強く見られた。たとえば、ある曲芸師が自転車を購入すると、それにつられて数名が自転車を購入したなどである。また、携帯電話も２～３名が購入したのがきっかけで、現在では10名ほどが携帯電話を持っている。このような、流行は品物だけに限らず、たとえば、構成員の誰かが使った決まり文句や公演後のボーリング・ゲームのように、言葉（流行語）や娯楽などのこともある。一般に、これらのブームは場所ごとに過ぎ去っていくことが多かった。

その他に、まとまりを感じさせるものとして、所持品の共有をあげたい。サーカスでは構成員間で自己の所有物と他人の所有物が共有される傾向が見られた。比較的親密な人間関係にある者同士において、所有者に関わらず品物が頻繁に共有されることは、韓国社会では一般的に見られる。サーカス団におい

てもその例外ではないともいえるが、共有の対象となる範囲がやや広いと思われる。身の回りの日常品や衣料品をはじめ、靴下やシャツといった下着類や携帯電話までが共有されることがあった。携帯電話に至れば、携帯電話の所有者よりも、周囲の者に連続して電話が取り次がれるため、所有者が電話を使用できないこともあった程である。

また、個人の私物も不要になるとサーカス団内で使い回されることが多く、携帯電話や寝小屋のテントまでがその対象となる。確かに、このような所持品の貸し借りは、持ち逃げが多いサーカス団では警戒される向きもある。それでも、同じサーカスにいる構成員が「困って頼んでいる」のに「助けない」という非難にもつながるため、貸し借りが行われるのである。しかし、そのような強要される貸し借り以外にも、自発的な仲間意識が働いて行われる貸し借りも多いとも思われ、たとえ前者のような貸し借りを通じても、お互いの助け合い意識というのは見られるようである。そして、そのことによって構成員同士が結びついている側面も無視できない。

まとめ　戦略としての「家族」

1．戦略としての「家族」

フィクションとしての「家族」が集団内で形成される例は多い。その中でも、サーカス集団と同じく構成員の流動が激しい日本の大衆演劇においても「家族」が戦略的につくられていることは注目されることであろう。

以上に見てきたように、韓国のサーカス団では「chip」（家）、あるいは「sikku」（家族・世帯の構成員）という用語、「俺たちは家族だ」や「構成員は一人一人が家族の一員である」というフレーズが頻繁に用いられてきた。これらも先の集団が擬制家族を創りだしてきた手段とまったく変わりない。これらの言葉やフレーズを多用することは、自分たちがあたかも一つの家族であるかのように思い込ませるのに有効に作用するのであり、それによって集団のまとまりを図ろうとするものであったといえる。

さらに、サーカスでは、団長に対して「オヤジ」あるいは「aboji」（父）と呼んでいた。団長はサーカス団の長であり、「親父」は「家族」の長である。つまり、団長を「親父」と呼ぶこと、あるいは呼ばせることが、「家族」をより一層まとめる働きをしていると指摘できる。また、「本部のお母さん」の存在についても本文中に触れたが、これは、たとえば日本のヤクザ社会では親分の配偶者が「ネエサン」と呼ばれるのとよく似ている。ネエサンは子分の妻子の面倒を見て、若い組員の母や（呼び名のとおり）姉のかわりをし、ときには子分と親分のあいだのクッション役もつとめる（Raz　1992：204）のである。このことは同じく擬制家族を創りだしている韓国サーカスの「本部のお母さん」と基本的な役割に相違はない。

その他にも、韓国では、「父母はしばしば天に比喩され、“不孝な子供は雷に打たれる”ということばが通用し、“父母の恩恵は昊天罔極<” >といい、不孝な子供は社会から排斥され、葬られる」（崔1977：34,<　>は筆者が補足）というように、父母に対する「孝」は絶対的なものとされ、そのことによって家族という集団がまとめられてきた。同様に、父母への「孝」を絶対視する風潮は、サーカス団という「家族」の中でも、両親の役割を演じる「団長」と「本部のお母さん」の地位を強めていると考えることもでき、そのことによって集団としての統制がとれていったといってもよいだろう。

以上のようにみてくると、韓国の一般社会で使われる「chip」と「sikku」を中心とした「家族」の概念を意識させる言説が、構成員が流動しやすい集団をまとめるために韓国のサーカス団の中に巧みに取り込まれていたことがわかる。

韓国のサーカス団での「chip」は、あたかもサーカス団が「大家族」であるかのように仕立てあげた、人工的に意識内で創りあげられた「家」であり、想

像された共同体としての「家」であった。そして、この想像された「家」の成員である想像上の「家族」としての構成員が、まさにサーカスで「sikku」と呼ばれたのである。つまり、これらの用語を用いることによって、それぞれ全くの他人である構成員たちが、まるで一つの「家族」のようなまとまりを持っているかのような錯覚、あるいは幻想を創り出すのに成功している。

移動集団としての韓国サーカスでは、管理が行き届きにくく、一般社会ではみだされた人々の受け皿として構成員を取り込んできた。さらに、一度抜け出したサーカス構成員も、自らが創りだした「社会」という枠を乗り越えられずに、あるいは舞台の上で注目される生活が忘れられなかったり、移動生活に戻りたくなったという理由で、再び構成員としてサーカスに戻ってきた。そして、そこで生じる社会的な緊張を緩和するために構成員の流動が再び繰り返された。つまり、流動による集団の崩壊を防ぐための一つの戦略として、「chip」や「sikku」といった韓国一般社会で強く影響を及ぼしている家族構造を模倣した「家族」による集団の統合がはかられていたのである。そのことによって構成員は、常に「家族」を意識するのであり、集団としてのまとまりを一時的にも見せていたのである。

2．共有されるイメージと戦略

構成員の流動が頻繁に見られる集団において、戦略的に擬制親族やフィクションとしての「家族」は見られた。また、韓国のサーカスにおいても、全く同様の戦略がとられていたことは、本論からも指摘された。しかし、さらに付け加えて述べるならば、ここで問題として取り上げるべきなのは、「俺たちは家族だ」といったような言説の発信者と受信者の双方が受け取る、共通した「お定まりの」イメージだったともいえるだろう。似通った文化的背景に育った者に植えつけられた、「家族」という言葉からくる共通のイメージである。「家族」と聞くと、多くの人は一家団欒であるとかといったイメージで、何の疑問もなくその「暖かみ」や「仲の良さ」といった言葉で語られるところのイメージを受け入れやすいものと思われる。仮にでも、「家族」という言葉から少しでも「暖かみ」を感じるとすれば、その「暖かみ」を擬似的にも感じてみたい、あるいは他人からその「暖かみ」が受けていると見られたいという意識が働いているのではないかということである。

Dサーカスを個人のレベルから眺めてみた場合、孤独を感じていると打ち明ける構成員が大半であった。花形スターのある曲芸師は幼少の頃からサーカスで生活をしており、サーカスに知人が多くいるにもかかわらず、「心から友人と呼べる奴がいない」と語っている。これは若年層にだけ見られることではない。ある40代の構成員は、「一緒に遊ぶ相手もなく、とても退屈だ」という。その他にも、「あいつは友達がたくさんいるようにいっているが、そんな親しい友達なんていないよ、嘘だよ」という話が聞かれるなど、構成員たちは何らかの孤独を感じている。

これらの発言は、構成員たちの入団の経緯にもよるが、これらの証言をもって、サーカスの構成員は孤独を感じていて、サーカス団に関わる以外の人々が孤独を感じていないと主張するつもりはない。しかし、彼らが親族や友人を多く持っていないという事実からは、家族に対する思い入れや憧れがそれだけ強いという見方もできるだろう。

そのように考えてみると、「家族」と聞いて「(僕らは) 一家団欒であらねばならない」と感じる、あるいは「(彼らは) 一家団欒なのであろう」と感じることを利用して、自らも擬似的な「家族」の「暖かみ」を感じてみたいと思う者がいても不思議ではない。栗原は、サルトルを引き合いにして、移民労働者や親のいない子供や独身者が呼ぶ「私の家族」がサルトルやフーコーが呼ぶところの友愛に近いと指摘した（栗原　1992：19-20）が、サーカスの構

成員たちはその友愛を求めるために「家族」というゲームを楽しんでいたともいえるのである。

もちろん、このことをもって彼ら全員が、孤独を持ち、それを癒すために「家族」を宣伝しているサーカスに入って「家族」の気分を味わっている「不幸な人たち」というのではない。むしろ、彼らは様々な経緯でサーカス団に入団してきており、それぞれの人間関係をつくりながらサーカスの生活を「楽しんでいる」といってもよいだろう。しかし、我々が「家族」という言葉から読みとらなければならないことは、「家族」という言葉からくるイメージを利用しようとする者たちの戦略なのであり、その言葉にすがろうとする者たちの孤独や存在、あるいはその言葉によって疑いもなくたとえば「仲の良さ」といったイメージを感じる我々の安易な認識なのである。

レポーターがやや感動的に「サーカスは本当に一つの家族のようなところでした」と語った裏には、人々の戦略や、その戦略に自らを預けてしまいたいといった人々の「思い」が秘められているということにも目を向ける必要があるだろう。

謝辞

本稿は修士論文の一部を大幅に加筆訂正したものである。修士論文執筆の際にあたって東京外国語大学の中山和芳教授、栗田博之助教授、アジア・アフリカ言語文化研究所の川田順造教授にご指導を頂いた。また、本稿執筆にあたっては国立民族学博物館の朝倉敏夫助教授から貴重なコメントとご指導を頂いたと同時に、同志社大学の森川眞規雄教授にも大変お世話になった。諸先生方に心から感謝したい。

しかし、せっかく頂いた多くのご指摘を、どれほど活かすことができたのか心許ない。活かされなかった点については今後も研究を続けていくうえでの課題として一層の研鑽に励みたい。

<註>

1 本調査は大韓民国で行っており、調査対象者は韓国人である。調査に用いた言葉も現在大韓民国で使用されている言葉による。そのため、本論の中では調査で得られた回答に従って、韓国、あるいは韓国人、韓国語と表記している。朝鮮半島をフィールドとする者として、表記法に政治的意味合いがことさら深くなるのは承知の上であるが、本稿においては、その目的に致命的な打撃を与える性格ではないことから、調査中において日常的に使用された表現法に則った。本論中に使用された語句が、どの範囲の地域や人々を指示してのことであるかは、文脈の上で適宜判断がつくかと思われる。そのことを留意された上で閲読いただけると幸いである。

2 調査は、1994年9月17日から1995年6月12日までの本調査と、1995年8月10日から同年9月9日までの補助調査に分けて行われた。両調査とも、彼らと一定期間、行動をともにするフィールドワークという手法をとり、そこから得られた資料と、聞き取りをもとに分析を行っている。また、調査は大韓民国政府奨学金によって可能となった。

3 本文中、翻訳をとらない形式で記載された韓国語の表記については、すべてMcCune-Reischauer方式のローマ字表記に従ったが、正確な現地発音が判別できない場合には、「」付けのカタカナによる日本語の音訳で表記した。重ねて、そのことを留意されたい。

4「オヤジ」と「aboji」については、前者が年齢に関係なく使われていたのに対し、後者は実際の年齢差が団長と親子ほど離れている若い構成員に使われる傾向があった。

<参照文献>

Anderson, Benedict 1983 *Imagined Communities*, Verso Editions:London＝1987 白石隆・白石さや訳『想像の共同体』リブロポート

崔在錫 1976『韓國人의社會的性格』＝1977 中根千枝監修『韓国人の社会的性格』学生社

伊藤亜人 1977「契システムに見られるch'inhan-saiの分析」『民族学研究』41/4

小山修三 1992『狩人の大地』雄山閣出版

栗原彬 1992「メタファーとしての家族」鶴見俊輔他編『メタファーとしての家族』岩波書店 pp.3-22

李光奎 1973「韓国家族の構造」中根千枝編『韓国の農村の家族と祭儀』東京大学出版会 pp.13-40

李光奎 1975『韓國家族의構造分析』一志社

李光奎、李杜鉉、張壽根 1983『韓國民俗學概説』學研社

Raz, Jacob＝1992 渡辺ちあき訳 「擬制血縁制度としてのヤクザ」 鶴見俊輔他編 『メタファーとしての家族』岩波書店pp.178-209

鵜飼正樹 1994『大衆演劇への旅』未来社

宇根元由紀 1988『サーカス放浪記』岩波書店

横山廣子 1990「大理白族の擬制的親族」阿部年晴他編『民族文化の世界（下）』pp.242-264

Dサーカス団構成員呼称表（1）

	01(61)	02(51)	03(46)	04(42)	05(41)	06(41)	07(36)	08(36)	09(32)	10(30)
01(MS)		役，叔	ﾆﾑ	ﾆﾑ	ﾆﾑ	叔	ﾆﾑ	ﾆﾑ	ﾆﾑ	ﾆﾑ
02(ML)	役		親	親	ﾆﾑ	ﾆﾑ	ﾆﾑ,ｱﾅﾀ	ﾆﾑ	ﾆﾑ,親	親
03(FL)	氏	cp,捨		cp	cp	氏	cp	叔	叔	姉
04(ML)	氏	氏，捨	cp		捨	氏	cp,氏	cp	兄	兄
05(ML)	氏	氏，捨	氏	捨		氏	氏	氏	兄	兄
06(FS)	ｵﾊﾞ	＊ｱﾅﾀ	ｵﾊﾞ	ｵﾊﾞ	ｵﾊﾞ		ｵﾊﾞ	ｵﾊﾞ	ｵﾊﾞ	ｵﾊﾞ
07(MS)	氏	cp,捨	cp	cp	cp	氏		cp	兄	兄
08(FL)	氏	氏，捨	cp,捨		cp	氏			叔	姉
09(ML)		捨	捨	捨	捨	氏	捨	氏，捨		氏
10(ML)		捨	氏，捨	捨	捨		捨	捨	氏	
11(ML)	捨	捨	捨	捨	捨		捨	捨	捨	捨
12(MS)	捨	捨	捨	捨	捨	ｻﾝ,捨	捨	捨	捨	ｻﾝ,捨
13(MS)	a	a	捨	捨	捨	a	捨	a	捨	捨
14(MU)	捨	捨	捨	捨	捨	捨	捨	捨	捨	捨
15(MS)	捨	捨	捨	捨	捨	捨	捨	捨	捨	捨
16(ML)	a	a	a	a	a	a	a	a	a	a
17(ML)	a	a	a	a	a	a	a	a	a	a
18(FS)	捨	捨	捨			捨			捨	捨
19(ML)	捨	捨	捨	捨	捨	捨	捨	捨	捨	捨
20(ML)	捨	捨	捨	捨	捨	捨	捨	捨	捨	捨

Dサーカス団構成員呼称表（2）

11(29)	12(28)	13(26)	14(26)	15(26)	16(25)	17(24)	18(21)	19(20)	20(13)	
ﾆｭ	ﾆｭ	ﾆｭ	祖	ﾆｭ	ﾆｭ	ﾆｭ	祖	祖,ﾆｭ	＊祖	01
親	ﾆｭ	ﾆｭ	父	ﾆｭ	親	親	ﾆｭ	父→親	伯	02
姉	叔	叔	叔	叔	叔	叔	叔	叔	叔	03
兄	兄	ｵｼﾞ,兄	ｵｼﾞ	ｵｼﾞ	兄	兄	ｵｼﾞ	兄	叔	04
兄	兄	ｵｼﾞ	ｵｼﾞ	ｵｼﾞ	兄	兄	ｵｼﾞ	兄	ｵｼﾞ	05
ｵﾊﾞ	＊ﾆｭ	＊ﾆｭ	ｵﾊﾞ	ｵﾊﾞ	ｵﾊﾞ	ｵﾊﾞ	ｵﾊﾞ	ｵﾊﾞ		06
兄	兄			ｵｼﾞ	兄	兄	叔夫	兄	ｵｼﾞ	07
姉	叔	叔		叔	叔	叔	叔	叔	叔	08
兄	兄	兄		兄	兄	兄	ｵｼﾞ	兄	ｵｼﾞ	09
捨	兄	兄	兄	兄	兄	兄	ｵｼﾞ	兄	ｵｼﾞ	10
	兄	兄	兄	兄	兄	兄	ﾆｲ	兄	叔	11
捨		兄	捨→ｻﾝ	兄	兄	十ﾆｲ	ｵｼﾞ	捨→兄	ｵｼﾞ	12
捨	a		a	a	a	a→aﾆｲ	aｵｼﾞ	a→aﾆｲ	aｵｼﾞ	13
捨	捨	捨		捨	捨			捨		14
捨	捨	捨	捨		捨	捨		捨		15
a	a	a兄				a兄	aﾆｲ	a兄	a叔	16
a	a	a	a		a		aﾆｲ	aﾆｲ	a叔	17
捨	氏				捨	捨		捨	姉	18
捨	捨	捨	捨	捨	捨	捨	捨		兄	19
捨	捨	捨	捨	捨	捨	捨	捨	捨		20

Dサーカス団構成員呼称表の注釈

韓国語でいう「アナタ」[tangsin]には、対等な相手に対する呼びかけ、夫婦に対する呼びかけ「*アナタ」の他、目上の人を敬った呼びかけでもある。団長の「02」は、「03」「04」「05」「07」「08」「12」との対話のなかではむしろ [tangsin]という言葉を使う傾向にあった。

「ニム」[nim] は、尊敬を表す接尾語であり、役職の後につける。ちなみに「役」と書いているのは、役職の後に接尾語「ニム」を付けずに呼び合っていることを意味する。

「オバ」は、主に既婚の女性に対して親しみを込めて呼ぶときに用いられる[ajumoni]（おばさん）という言葉を名前の後に付けて呼んでいたことを示す。「オジ」は、主におおよそ20歳以上の男性に対して親しみを込めて呼ぶときに用いられる[ajossi]（おじさん）という言葉を名前の後に付けて呼んでいたことを示す。

「親」は、韓国のサーカスだけで使われる [oyaji]（親父）という日本から入った言葉で、「父」は、日本語のお父さんに相当する韓国語の [aboji]という言葉で呼んでいたことを示すが、[oyaji]と呼ぶ方がややくだけたニュアンスがある。「祖」は、[halaboji]（おじいさん）という言葉で呼んでおり、「叔」は、韓国語でいう[samch'on]（叔父）,[imo]（叔母）という言葉を名前に付けて呼んでいたことを示す。

「*祖」は、[halaboji]という言葉の前に、「01」の出身地である地名を付けて呼んでいたこと、「叔夫」は、叔母の夫に対する韓国語の [imobu]という言葉で呼んでいたことを示している。また、「伯」は、韓国語の[k'unappa]（伯父）という言葉で呼んでいたことを示す。

「捨」は、名前を呼び捨てていたことを示す。「氏」は、日本語の「さん」に相当する人の名前の後に付けて呼ぶ敬称であり、名前に「氏」を付けて呼んでいたことを示す。「サン」は、日本では慣習的に他人を呼ぶときの敬称として「サン」を付けるということ知っており、かつ「サン」を付けて呼んでいたことを示す。

「兄」「姉」は、それぞれ韓国語の [hyong][nuna]という男性が兄姉に対する敬称をつけて呼んでいたことを示す。「ニイ」は、女性が兄を呼ぶ韓国語の[oppa]（兄）という言葉で呼んでいたことを示すが、[oppa]には、その男性に媚びているニュアンスも含んでおり、その場合は日本語でいう「お兄さん」に相当するかと思われる。男性が兄に相当する男性に対して[oppa]と呼ぶということは少し侮蔑したニュアンスを持っている。

「cp」は、韓国で子供がいる両親を呼ぶときに、慣習的に子供の名前に[appa]（パパ）[omma]（ママ）という言葉を付けて呼ぶことも多いが、敬称に含まれやすい上位下位の関係が入りにくい呼び方のようである。夫婦の間で呼ぶときも、「主人」「家内」に相当する言葉で呼ばず、この呼び方が多く用いられる傾向が見られる。

「ａ」は、あだ名で呼ばれていたことを示す。あだ名で呼ぶ呼び方はややくだけたニュアンスがある。「aオジ」「a兄」などは、あだ名にそれぞれの敬称を付けて呼んでいたことを示している。

「→」は、呼び方が矢印の方向に変わったことを示しており、「,」は、時と場合によって両方の呼び方をすることを意味している。空白は不明である。

「02」はDサーカス団団長であり、「06」は団長夫人である。また、「01」はDサーカス団の総務であるが、団長の実の叔父にもあたる。「12」は調査者である。なお、「03」と「07」、「04」と「08」は夫婦であり、「20」は「04」夫婦に預けられている。

表の見方は、縦が呼ばれる側で、横が呼ぶ側である。したがって、表の中の言葉は、呼ぶ側が呼ばれる側をどのように呼んでいるかを示したものといえる。縦に記載した人たち（番号）の横に括弧付きで書かれた記号は、左が「Ｍ＝男性」「Ｆ＝女性」であり、右が「Ｌ＝長くサーカスを続けている」「Ｓ＝サーカスをまだ長く続けていない」「Ｕ＝不明」であることを意味している。横に記載した人たち（番号）の横に書かれた数字は、調査者が調査を終えて退団した1995年 6月の時点の満で数えた年齢である。

サーカスを続けて長いか長くないかの基準は設定が難しいが、ここではおおよそ ３～４年ということにした。この判断は、幼い頃から曲芸を覚えてきた者たちが、サーカスで共同生活をしている者を、さらにもう一段階「ヨソモノ」か「ミウチ」を判断している基準が大体３～４年であることによっている。

最後に、ここに記載した20名は、作表の限度からも1995年10月頃の構成員のうちから筆者が聞き取りが容易で呼称の聞き取りが可能な20名であったと同時に、それに基づいて作成した表の結果が、調査者が調査中に知見したものを大きく違えることがないものであることを記しておきたい。